

1. 「令和の日本型学校教育」が提起したこと



学校教育を巡る最大の問題は不登校

- 不登校・・・小学校：13万7,704名 中学校：21万6,266人
- 子どもたちは、学びたくないわけではない
- 広域通信制高校の活況・・・N校とS校の在籍者数：30,648名
- 不登校の子どもの切実な訴え
- 「あそこには、やらなきゃいけないことと、やっちゃいけないことしかない」
- 学校に子どもたちが「やりたいこと」はあるのか？
- 子どもたちは「やらなきゃいけないこと」があるのも納得している
- しかし、自分のペース、自分に合ったやり方で、見通しをもって自立的にやりたい

学校における児童生徒の多様性を包摂する必要性

- どの学校においても、多様な個性や特性を有する子供が在籍している実態が顕在化している。
こうした多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題。

小学校（35人学級）



中学校（40人学級）



※各数字の出典は諮問参考資料P45,46参照

https://www.mext.go.jp/content/20242127-mxt_kyoiku01-000039494_03.pdf

「中間層」に焦点を合わせる指導だけでは多様性への対応は困難

- 小学校 4 年生の本音：
- 「授業の内容が難しすぎると思う」に「とてもあてはまる」「少しあてはまる」・・・28.2%
- 「授業の内容が簡単すぎると思う」に「とてもあてはまる」「少しあてはまる」・・・27.3%
- 授業の内容が自分に合っていると感じている子どもは、わずか44.5%？

文部科学省 令和4年度 義務教育に関する意識に係る調査

- 授業が「わからない」「つまらない」・・・学校に行く意味を感じない
- 「お勉強」だけなら、動画やネットでも十分学べる・・・広域通信制高校の活況
- 「そんな学校、無理して行かなくてもいいんじゃない？」と考える保護者・社会

学習の自立に課題

- 国際学力調査 OECD PISA2022
- 加盟37か国中、数学的リテラシー 1 位、科学的リテラシー 1 位、読解力 2 位
- しかも、経済状況等による学力格差も比較的小さい・・・公正な教育を実現
- 学校が再び休校になった場合に自力で学んでいけるか 34位

文部科学省・国立教育政策研究所 OECD生徒の学習到達度調査 PISA2022のポイント

- 「令和の日本型学校教育」：多様性を公正な包摂と、自立した学習者の育成
- 従来の一斉指導、協働的な学びに加え、個別最適な学びへの挑戦が不可欠

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して (2021年1月26日 中央教育審議会答申)

- 「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、「**正解（知識）の暗記**」の比重が大きくなり（8頁）
- 学校では「みんなで同じことを同じように」を過度に要求する面が見られ、学校生活においても「**同調圧力**」を感じる子供が増えていった（8頁）
- 学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、「何をして良いか分からず」学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、**自立した学習者**を十分育てられていなかったのではないかという指摘もある（13頁）

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～



学びをデザインする高度専門職としての教師 デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白 総合的な勤務環境整備

多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる 民主的で持続可能な社会の創り手 をみんなで育む

自らの人生を舵取りする力と 民主的で持続可能な社会の創り手 育成（今後の検討イメージ）

「好き」を育み、「得意」を伸ばす
（興味・関心）



当事者意識を持って、自分の意見を
形成し、対話と合意ができる

【各教科等での検討イメージ】

好き・得意をベースとした
主体的な進路選択の促進

高
中
小
幼

課題設定
の充実

グループ探究
個人探究

総合

生きて働く「確かな知識」の習得

興味・関心が広がる
教材・学習方法の選択を促進

自分の意見を表現する活動の充実

探究的な要素を持つ学習活動の充実

家庭学習の内容を自律的に決めら
れるような段階的指導
（家庭学習はじめ学習習慣の確立を含む）

各教科等

児童生徒主体のルール
形成や学校生活改善、
行事の創造等の明確化
（みんなが学びやすいルールや環
境の構築を含む）

納得解を形成しようとす
ることの重要性の明文化
（安易な多数決の回避や少数意
見の吟味）

特別活動

考え、議論する
道徳の徹底

（主体的な判断の
重要性、知・徳・体
の調和のとれた発達
に向けた、道徳的価
値の対立を乗り越え
る必要性や道徳的
実践の強調）

道徳

言葉を用いて思考を深めていく指導

他者と関わり協同する力の育成

多様な子供を誰一人取り残さない
視点としての個別最適な学びと協
働的な学びの一体的充実

科学的知見も生かした
効果的な指導計画・授業方法
児童生徒の学習方略の指導

障害や認知特性等
多様な実態を踏まえた調整
（教科等、家庭学習含む）

全ての活動の基盤としての
心理的安全性の確保

学びをデザインする高度専門職としての教師
「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白

デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
総合的な勤務環境整備

2. 教育の方法を、料理のアナロジーで考える



妄想「新しい学び」

- かつてNHKに「妄想ニホン料理」という番組があった
- 「日本料理を全く知らない海外の料理人が『かっぱ巻き』『福神漬け』『ジンギスカン』など、ごくごく簡単なヒントだけを頼りに作ったら、どんな料理が出来上がるのか。生みだされる奇想天外、抱腹絶倒な“ニホン料理”を楽しむ異文化交流のクッキングバラエティー」（NHKアーカイブスの説明より）
- 個別最適な学び、探究的な学び、教科等横断的な学びなどの「新たな学び」（本当は新しくないけど）の実践にあたり「妄想ニホン料理」のようなアプローチをしていないか？
- ちゃんとした勉強もせず、言葉に関する勝手なイメージだけで、思いつきの「工夫」をした授業
- 1 単位時間の中で「7 分間自力解決」を「15分に延長すれば」自由進度？
- 算数の教科書を各自で進めさせれば自由進度？・・・教科書は「独習」用にできていないので無理
- そんなものでいいはずがない、うまくいくはずがないと、なぜ気付けないのか？
- そんな状態で「個別最適な学びでは深まらない、やっぱり協働が必要」「調べてまとめて発表するのが総合」などと言い出す教師のなんと多いことか・・・チコちゃんに叱られるよ！

美味しくて栄養ある料理を生み出す流儀は星の数ほどもある

- 何にでも通用するベストな一つの方法があるわけではない：様々なよい方法がある
- 優劣はない：どんな方法でも、基本を守り手を抜かなければ、美味しくて栄養のある料理ができる
- 混ぜるな危険：下ごしらえから仕上げのソースまで、すべての要素は相互に関連している
- 何かを取れば、何かは捨てる：すべての条件を満たす一皿はないし、できてもあまり美味しくはない
- あえて言えば、コースでなら多くの条件を満たすことができる・・・カリキュラムレベルで考える
- 「カラフルなカリキュラム」による多様な経験の提供というアプローチの可能性
- いろんなものが食べたい：毎日同じ味付け、料理法では飽きるし、身体にわるい
- 「いいとこどり」は至難の業：いずれの方法にも高度に習熟していないと、とても無理

さまざまな流儀があると同時に、どれもみな所詮は料理

- どんな料理も所詮は料理：料理のなんたるかを会得していれば、少しの勉強で何でも作れる
- セントラルキッチンで作られた半完成品を、店舗でマニュアル通りに調理する作業を何十年やっても料理の方法は身につかない
- 「総合が難しい」「個別最適がわからない」のではなく、授業が作れないだけ
- まずは、美味しいものをたくさん食べる
- 自分が美味しいと思った料理の方法をしっかりと学ぶ（何らかの流儀を過去にちゃんと学びましたか？）
- 併せて、自分とは異なる流儀に敬意を払い、謙虚に学ばせてもらう
- 異なる流儀を学ぶ際には、これまでの習慣や先入観を離れ、初学者としてしっかり学ぶ
- まずは基本のレシピに忠実に、アレンジは基本のメニューが作れるようになってから
- 自己流の「研究」よりも、まずは「勉強」・・・「本校ならでは」、地域ごとの「〇〇スタイル」の多くはゲテモノ

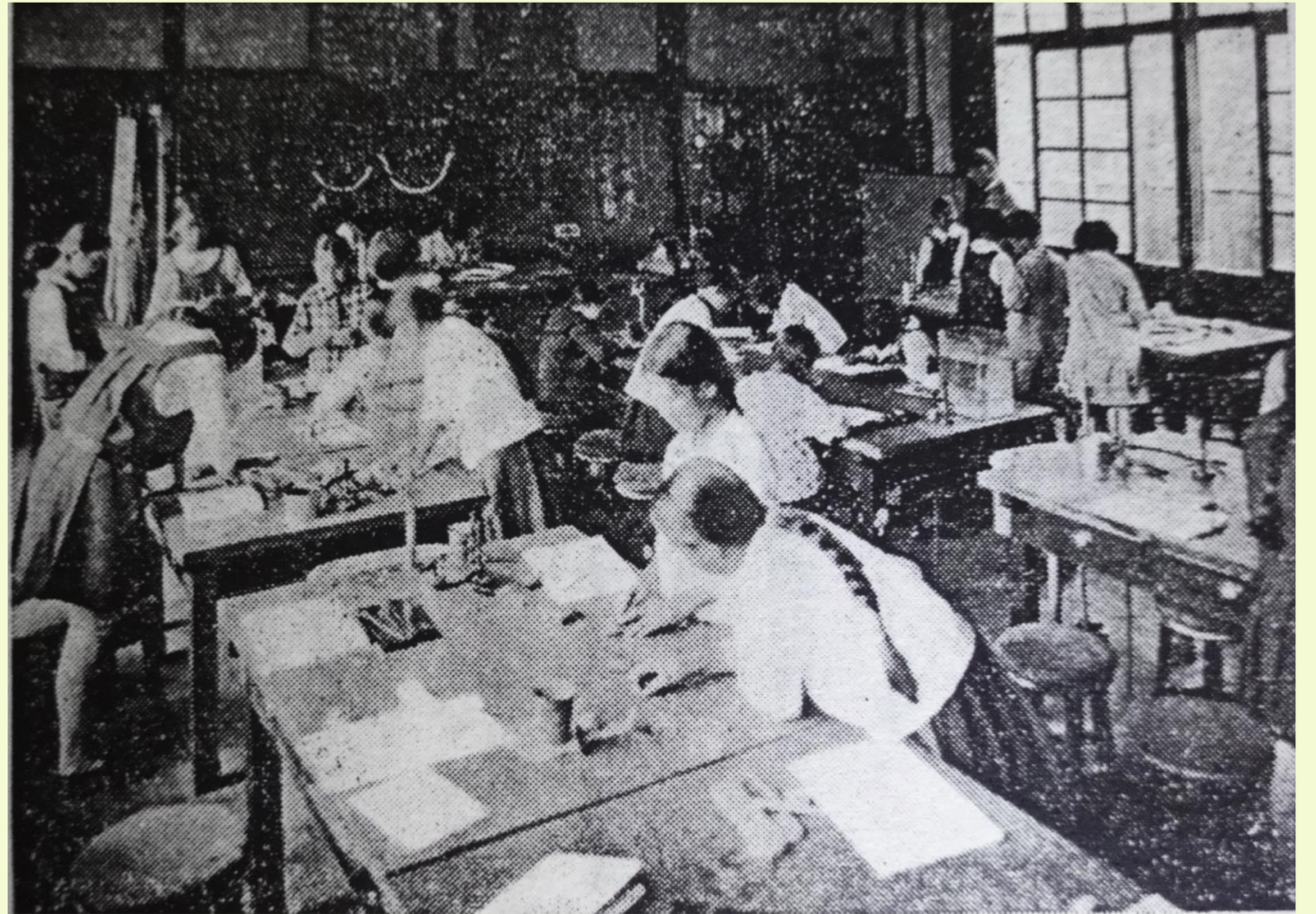
3. 单元内自由進度學習



100年前に世界各地で誕生した個別最適な学びの源流



ドルトンプラン(1920年代)



奈良女子高等師範学校附属小学校
「独自学習」(1920年代)

個別化・個性化教育：愛知県東浦町立緒川小学校（1980年代）



緒川小学校の教育に関する効果研究

- 1990年3月の緒川小卒業生の大学・短期大学への進学率は56.4%
- 愛知県の平均進学率37.9%と比べて18.5ポイント高かった

(田中節男 1995 「個性化教育の成果」『椋山女学園大学研究論集』Vol.26,143-156.)

- 近隣の高校生との比較で緒川小卒業生が肯定的な反応を示した項目
- 「自分でテーマを決めたり選んだりして、いろいろな活動を通して学習するのが好き」
- 「図書館・博物館・美術館・展覧会などに自分から行く」
- 「現代の社会問題について関心がある」
- 「小学校で学んだことが役立っている」

(奈須正裕 2000 「学力をどうとらえ、どう育てるか」『科学』Vol.70,No.10.834-838.)

単元内自由進度学習を基礎づける2つの心理学的知見

- キャロルの学校学習のモデル（1963年）
 - 「十分な時間が与えられれば、すべての学習者が学習課題を習得できる」
 - 「うまく学べないのは能力が低いからではなく、十分な時間を与えられていないから」
 - 一人ひとりの子どもが自分のペースで学び進め、単元終了時に「必修」内容が終わればよい
 - ブルームの完全得学習（マスタリー・ラーニング）を支える原理
- クロンバックのATI（Aptitude Treatment Interaction 適性処遇交互作用）（1957年）
 - 「複数の教材や指導法の効果は、子どもの学習適性によって異なり、時には逆転する」
 - 「うまく学べないのは能力が低いからではなく、その子にあった教材や指導法が提供されていないから」
 - 多様な教材、指導方法を提供し、教師の支援の下、子どもが選択できるようにする

磨き抜かれた教育方法としての単元内自由進度学習

- 2つの知見に基づき、1960年代から、国の支援を受けた米国の大型プロジェクトが展開

IPI (Individually Prescribed Instruction) ピッツバーグ大学

IGE (individually Guided Education) ウィスコンシン大学

PLAN (Program for Learning in Accordance with Needs) 米国行動科学研究所

- 留学先のウィスコンシン大学でIGEを経験した加藤幸次氏が、1970年代末から緒川小をはじめとする学校で、日本に合ったものへと改良して生まれたのがオリジナルの単元内自由進度学習
- それから半世紀にわたり、さまざまな試行錯誤を経て教育方法としての磨きをかけてきた
- 基本を忠実に守って実践すれば、誰でも一定の成果を得ることができ、副作用もないことを確認
- もちろん、この「流儀」以外のやり方でも質の高い学びを実現することは可能
- ただ、入新井第一小が取り組んできたのはこの「流儀」なので、今日はこれを説明します

単元内自由進度学習の学力論

1) 学力保障：すべての子どもに、単元レベルでの内容的な学力を着実に保障する

※「個別だから『深い学び』にならない」というのは誤解。単元や教材のつくり方次第で十分可能

個別＝ドリルという発想は捨てよう

どうしても押さえないことは「先生動画」（短いピンポイントの解説動画）という手もある

2) 自立した学習者の育成：学び方の「得意」に気づき、メタ認知を働かせ、自分に合った学び方

で学習を自己調整できるようにする

※学び方の「得意」に気づき、学習の自己調整の練習が存分にできるようにするには、選択肢を多く、

コースの時間を長くする（複数教科同時進行もこれに貢献）ことが大切

・・・この学力論の2つの側面が両立するようにつくっていく

単元内自由進度学習の基本原則

- 単元をしっかりと構成する・・・「必修」とそれ以外の明確化、全員が時間内に学び終わられるデザイン
- 「環境を通して行う教育」の考え方を教育方法の基本に据える・・・幼児教育に学ぶ
 - ※教科書で「独習」は不可能（学習参考書との違い）・・・文脈情報の適切な追加
- その子に必要な教材、指導方法、時間をしっかりと保障する・・・特別支援教育に学ぶ
- 徹底した情報開示：単元指導案に相当する情報を手渡す・・・学習の手引き、ガイダンス
 - この学習が目指すものをわかりやすく伝える・・・説明書、ガイダンス
- 進度の速い・遅いが気にならないデザインにする・・・複数教科同時進行、複数コースの設定
- 速い子（半分の時間で終わる子も）への配慮を十分に行う・・・発展学習
- 教師のチェック（他律的制御）は最小限にする・・・自分の学びに責任をもてる子に育てる
- 協働的な学びは子どもが自発的に声をかけあって行うものを原則とする

単元レベルで教科の学びを一人ひとりの子どもに委ねてみる



奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社、2022年

教える教育から環境を整える教育へ

- 全員の子どもが教師の目の前にいない：どうやって教えるの？
- 適切な環境さえあれば、子どもは環境に関わり学んでいく
- もう1つの教育方法としての「環境を通して行う教育」

教科書を時間軸から解き放ち、空間的に表現する



点を結んで



棒を使って



色板を組み合わせで

1年生：図形の構成

幼児教育ではごく普通に実践されている



有能な学び手という子ども観に立ち、環境を通して行う教育を主要な方法としてきたから

学習環境との関わりで自立的に学ぶ(6年社会科)



GIGAスクール構想で整備された一人一台端末と高速大容量ネットワークが学習環境整備の省力化と高度化を実現

自分の学びに必要な情報を
個別的・自立的に取得



子ども同士で声をかけあい
自発的に展開する協働的な学び



アナログならではのアドバンテージ1: 体験・操作・表現活動

- デジタルは感覚モダリティが視覚・聴覚に限定されがち
- 過去に蓄積された膨大なアナログの資産を活かしたい



クルマのパーツを分解して、工業の仕組み(元請け・下請け)を学ぶ



雪国の暮らしを体験



多様な体験・操作を
通して「重さ」を実感
的に学ぶ

身体全体を使った「長さ」の学習

「直接比較と間接比較」

「任意単位と普遍単位」

を対比的・統合的に学べる学習
環境



歴史学習の成果を活かした ものづくりの発展学習



アナログならではのアドバンテージ2: 情報のsaliencyを高める掲示

- 情報のsaliency（顕著さ）が低い（目立たない）と、子どもにとっては存在しないも同然
- saliencyの意図的コントロールを意識した学習環境整備
- 全員に見てほしい情報はわかりやすい掲示で目立たせる
- 空間に展開することで、かなりの情報量を構造的に提供できる
- QRコードは、サムネイルなどで内容のイメージを持てるようにすると利用率が上がる

掲示に見入る子ども

掲示で議論する子ども

タテであることに何か意味はある？



活動の指示・説明は掲示でわかりやすく。いつでも、何度でも自力で確認できる



過去の学習を網羅的・明示的に整理。既習を活かして学ぶ

これまで学習してきた主張が伝わる文を書くための技

3年生



すがたを変える大豆



- ★題名や「はじめ」から、話題をたしめめる。
- ★例をあげる順序
- ★写真の使い方

こまを楽しむ



- ★一つの段落にはそれぞれ、ひとまとまりのないようが書かれている。
- ★「問い」と「答え」に気を付けると、組み立てや段落の中心ととらえられる。

4年生

アップとルーズで伝える



- ★考えを述べる時は、伝えたいことを印象づける組み立てをする。
- ★どのような具体例をあげるか例のあげ方を工夫する。

ウナギのなぞを追って



他の人の文章を読む時に……

- ★感想にはその人が文章をどう受け止めたか、理解したかかが表れている。
- ★ちがいはどこから来ているか、他の人の感じ方のよさは何かを考える。

徹底した情報開示：子ども主体の学びの前提条件

マイプラン学しゅう せつめいしょ

1年 くみ 名まえ（ ）

マイプラン学しゅうってなに??

じぶんでけいかくをたてて、じぶんでべんきょうするじかんのことです。一人ひとり、じぶんのペースでべんきょうをすすめます。

どうしてマイプラン学しゅうをするの??

1年生に、1人でも学ぶことができるようになってほしいからです。わかる、できるだけでなく、けいかくを立てたり、といをもったり、じぶんの学しゅうをふりかえってつぎに生かすことができてほしいとおもっています。

先生はおしえてくれないの??

こまったら、先生やともだちにおたずねしてもいいです。でも、まずはじぶんでか
んがえて、しらべてとりくんでみましょう。

どんなべんきょうをするの??

2つのべんきょうをします。あわせて10かいです。

こくご :「しらせたいな、見せたいな」

さんずう :「けいさん名人になろう」

きょうしつ、どんぐりホールなど、じぶんでばしょをきめて学しゅうします。

はやくおわたたらどうするの??

はやくおわたた人には、パワーアップコーナーもじゅんびしてあります。どんどん学しゅうをすすめてください。じぶんのわかりぐあいにあわせて、じぶんのペースでべんきょうできることが、マイプラン学しゅうのよさです。

自由進度学習 理科「てこのはたらき」学習のてびき

名前

目標

(標準時間8時間)

- ・ぼうが水平につり合うときのきまりを調べる。
- ・「てこ」や「てこ」を利用した道具について調べる。
- ★チェック1 学習カード提出
- ・「さおばかり」か「てんびん」を作る。
- ★チェック2 作品の提出
- ・「てこ」のはたらきについて分かる。
- ★チェック3 チェックテスト

学習の流れ

学習内容	教科書	学習カード	学習カード
① てこのはたらきについて調べる。	P72,73	学習カード1	学習カード1
② 力点や作用点の位置を変えると、どうなるかを調べる。	P74～75	学習カード2	学習カード2
③ てこ実験器で、どのようにすればつり合うかを調べ、つり合うときのきまりを考える。	P76～79	学習カード2	学習カード2
④ てこ実験器で、2カ所以上におもりをつり下げた場合について調べ、つり合うときのきまりを考える。		学習カード3	学習カード3
⑤ てこを利用した道具について調べる。	P80～83	学習カード4, 5	学習カード4, 5
★チェック1 学習カード1～5を先生に見せる。			
⑥ 「さおばかり」か「てんびん」を作る。	P81, 84	学習カード6	
★チェック2 作品と学習カード6を先生に見せる。			
⑦ チェックテストをやる。	チェックテスト		
★チェック3 チェックテストを先生に見せる。			
ここまでは、かならず終わらしましょう。			
★ 支点が、力点と作用点の間にない「てこ」のしくみを調べよう。			
★ たかしくんとよしこちゃんのシーソーの問題を解こう。			
★ 学校の中にある「てこを利用した道具」を3個以上見つけよう。			
★ 「もの作りカード」を参考にして、つりあいを利用した物を作ってみよう。			
★ 「てんびん」や「てこ」についてパソコンで調べてまとめてみよう。			

利用可能な時数

単元の目標と構成

評価＝チェックも
多様な方法で

学習の流れと利用
可能な学習材等

活動的・体験的な
学びも取り入れる

早く進んだ子ども
向けの発展学習

授業中、教師は何をする？

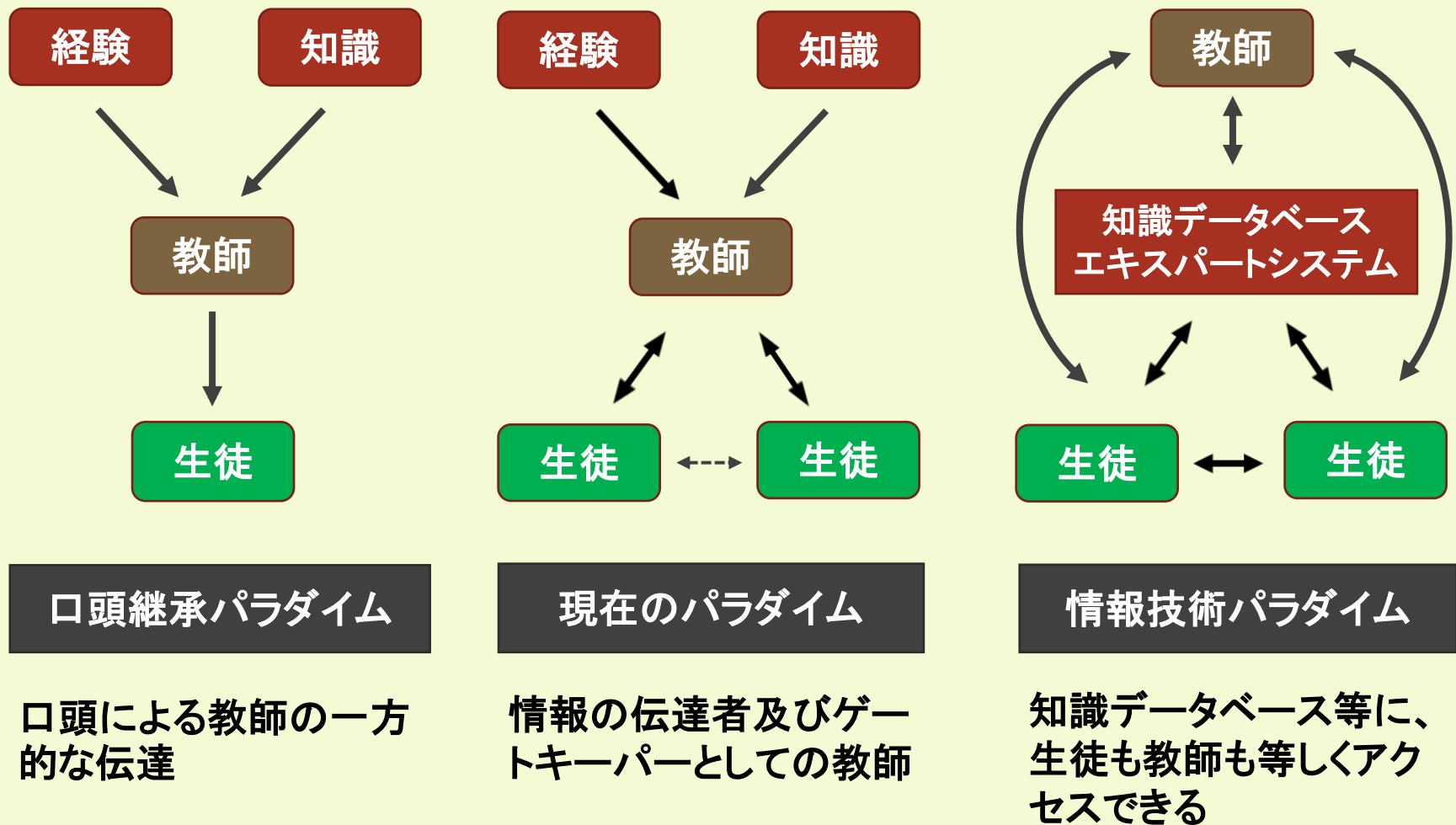
- 出来ない子にワン・オン・ワンで丁寧について指導するために個別にする？
- 「今日は誰に何を教えよう」という構えを見直す
- コースと学習環境がよく出来ていれば、教師は何もしなくてもいい
- 手持ち無沙汰？・・・大好きな子どもが一所懸命頑張っている姿を見る
- もちろん、緊急避難的には個別での指導もする
- しかし、複数の子どもがつまずく、指示を理解できない場合は、教材・環境の修正が本質的な作業

単元内自由進度学習における教師の構え

- 教師のチェックは1単元に2回程度。チェックが多いと、子どもが見えない
- 学習の様子に不安を感じるかもしれないが「普段の授業と比べてどうか」と考えてみてほしい
- 「約束」はしっかり守らせる。他人のじゃまをしない。道具の扱いとかたづけ等。
- 物品の破損は「ありうる」という構えが基本。ただし、叱らないわけではない。よい反省の機会とする
- 「危険」な行為には、一瞬も待たず厳しく指導する
- 子どもが進めない、遊ぶ、じゃまをする等のときには「なぜそうなるのか」を考える。多くの場合、教材や環境が不十分であるので、単元の途中でも修正や追加、見直しを行う
- 子どもを「信じて待つ場面」と「手を差し伸べる場面」の見極めは難しく、永遠のテーマ。これは一斉指導も同じ。場数を踏んで経験を積み、経験の意味を深く、また仲間とともに省察することが重要

単元内自由進度学習の作業手順

- 採択教科書を中心に、他社の教科書を参照・比較
- 学習指導要領、解説を参考に「必修」を明確化、教科の内容系統もしっかりと確認
- 学習のてびき、学習カード、学習環境づくり
- 早い子のために、魅力的な発展課題を開発する
- 先生チェックは最小限、先生が見るべき内容にする
- このコース、教材では難しい子はいないか？
- 難しい子がいれば、別なコース、別な教材、別な環境を検討・・・特別支援教育の発想
- うまく学べないのは、子どもに原因があるのではなく学習環境が不適合だから
- 一番シンドい子どものことを考えてつくる → 結果的に多くの子どもにとって学びやすくなる
・・・特別支援教育に学んだ「授業のユニバーサルデザイン」の発想



学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson, 1990)

Robert K. Branson 1990 Issues in the Design of Schooling : Changing the Paradigm. *Educational Technology*, Vol.30, No.4, 7-10.

従来型の個別・協働・ICT利用(基本は一単位時間)

一斉で課題提示



一斉で説明



一斉でまとめ

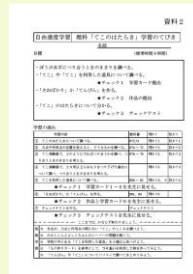


教師の指示で一斉でICT活用

教師の指示で一斉で話し合いや発表

これからの個別・協働・ICT利用(基本は単元)

単元のガイダンス



徹底した情報開示



協働も子ども同士で声をかけあって自発的に

豊かに整備された学習環境の下、多様な学習活動を多様な場で

教師が教える授業とは何だったのか？

- なぜ、いつも教師が教えてきたのか？
- 知識は偏在し、アクセスは容易ではなく高価だった
- 知識は教師が準備し、教室に持ち込むしかなかった
- その結果、教師から教わらないと学べない時代が長く続いた
- 子どもは教えないと学ぼうとしない、学べないという「神話」の誕生
- 学びの環境の変化・・・ICTの進歩と普及
- 「環境を通して行う教育」へのパラダイムシフトが可能に
- 結果的に、幼保小の連携・接続もスムーズに

子ども観の転換と授業のパラダイムシフト

- 子どもは無能な怠け者：教師が仕切る教育
→教師が教えなければ学ばない、学べない
- 教師の仕事は教授と管理
→授業の前提としての規律訓練
- 子どもは有能な学び手：環境を通して行う教育
→適切な環境と出合えば、自ら進んで学ぶ
- 教師の仕事は学習環境整備と足場架け
→徹底した情報開示、見とりと支援

